

『恋の骨折り損』における法と愛

大阪芸術大学 文芸学科 教授 団野恵美子

16世紀から17世紀にかけて、約150年もの間、イギリスでは女性向けの日常生活の手引書、女性の地位に関する論説や説教集、礼儀作法書が出版されてきた。父権制社会における女性の立場や結婚について、家庭生活手引書などの影響があることは、エリザベス朝演劇の端々に明白である。

シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の『恋の骨折り損』(*Love's Labour's Lost*, 1594-95)は、サウサンプトン伯の私設劇場での上演を目的に執筆され、人生の現実とかけ離れた学問に対する懐疑と、華麗なジョン・リリー風の文体を用いながらもその虚飾性を風刺するという、宮廷劇らしい趣向を凝らした喜劇となっている。

1. 劇の概要と特徴

ナヴァール国王ファーディナンドは、学問に専念して女性との交際も3年間断つことを宣言し、3人の貴族ピローン、ロンガヴィル、デュメインも一緒に断食と節制の生活を実践しようと計画する。そして、宮廷の1マイル以内に女性を立ち入らせないという制令を発布した後に、フランス王女が侍女3名ロザライン、マライア、キャサリンを連れて外交問題を解決するために宮廷を訪問することから事態は一変する。

王ファーディナンドは誓約を守るために、城外のテントで王女一行と外交会議を行うことになり、機知に富んだやり取りから、次第に王は王女の魅力に気付き、側近の貴族たちもそれぞれの相手となる侍女たちの虜となる。

女人禁制令では、宮廷人だけではなく田舎者コスタードも田舎娘ジャケネッタと一緒にいるところを逮捕され、奇矯なスペイン人アーマードーもジャケネッタに恋をしており、彼女への恋文をコスタードに配達させようとする。ピローンもロザラインに宛てた恋歌をコスタードに託す。手紙の取り違いから、男たちは誓約を破っていたことが曝され、共同戦線を張って女性たちとの恋愛を成就しようと努力することになる。

王女たちは男性たちの行動を嘲笑しながらも、恋愛に前向きになったところで、フランス王急死の悲報が届き、急遽帰国することになり、愛を受け入れるかどうかは1年後に回答することにする。

喜劇の終幕が婚約や結婚で華々しく締められる予想に反して、登場人物であるピローンでさえ、「我々の求婚は昔の芝居のように終わらない。ジャックとジルと一緒にあって、とはいかないんだ。あのご婦人方が優しければ、我々の余興も喜劇になったのになあ。」と嘆き、シェイクスピアは喜劇の世界の観念を打ち砕くことで、登場人物が虚構世界に依存しないことを見せつけているようである。

王が「まあ、あと12か月でけりがつくさ。」と慰めても、ピローンは「それは芝居には長すぎる。」と指摘し、ここでも実際の生活が芝居の中の世界の虚飾を

曝け出している。

2. 法と詭弁

ピローンは、3年間の宮廷生活と学問専心は誓ったが、女性と面会謝絶など契約の書面に実際に罷っていないこと、契約の内容から把握できる内容でさえも、文字として書かれていないという理由で拒否をする。言葉以外のことをしても誓いを破ることではないという論法である。

この契約書面の文字通りの意味しか受け取らないやり方で、局面を乗り切るパロディは、王の布告に反したコスタードのセリフにも繰り返される。女性といると逮捕される布告であるのに、コスタードは王が最初に使った「女」ではないことを示すのに、「お嬢さん」、「生娘」、「女の子」と次々と異なる単語に言い換えていく。これも書面に書かれていないことであれば許されるであろう、という字義通りの意味の解釈からであり、田舎者の弁解として揶揄され、王は言い逃れを許さずに有罪判決を下す。

3. 愛と詭弁

女人禁制の誓約を守るため、王は王女を敵軍の大將に見立てて城外の庭園に設営したテントに逗留させるところから、言葉のやり取りは機知を巡らせた戦闘となっていく。王が「美しい姫、王宮によろこそ」と呼びかけると、「美しいという言葉はお返しします。よろこそというだけのもてなしも受けておりません」と王女は虚飾に満ちた言葉を嫌っている。王女のセリフには「言葉のお化粧はもうたくさん」、「汚い手でもお金をあげればきれいだと褒められる」など、実のない飾り言葉を阻止する態度が一貫している。

コスタードと王女と対面したとき、一番大柄で見上げるくらい背が高いのが王女だと聞いた彼が、「胴回りがおらのちえみたいに細っこくねえから、他の女子のガードルが合いそうにもねえから」と正直に言って王女の見当をつけた場面から、コスタードの言葉はこの劇世界の中で信頼を勝ち得る。

ピローンはコスタードの不手際で恋文を暴露された腹いせに、コスタードに「鈍くさいやつめ、恥をかかせやがって…このオシドリたちはまだいるのか」と退場を迫り、王も「お前たち、失せろ」とコスタードとジャケネッタに怒鳴る。このとき、コスタードは「正直者は出て行って、謀反人は残しておけばいい」と呟く。

宮廷生活と日常生活の分別は、宮廷人でないコスタードにより強調されており、虚飾の言葉遣いの貧弱さとその人物の真価が、田舎者の実直な台詞で判決を下されるのである。